

『度曲須知』の三字切法に關する一考察

浦山 あゆみ

はじめに

長い間、漢字の音注は主に直音と反切が併用されていたが、特に反切は、音注を施す側には相應の理解と工夫が必要であり、また、読み解く者の側にはある一定の知識が要求されるものである。そこで、反切理解を助けるため、等韻圖を付した韻書が多く出現したが、必ずしも問題解決に至ったわけではなかった。したがって、少しでもたやすく求める音を理解できるよう、反切の改良もなされてきた。沈龍綏が著した『度曲須知』⁽¹⁾に見える新たな形の反切^{II}三字切法も反切改良の一つといえよう。『度曲須知』には字音分析において、また音韻用語の變遷においても、さらには明代の吳方言や戲曲理論などさまざまな側面から見ても大變重要な書物ではあるが、本稿ではこの三字切法における字音分析について検討し、一考察を加えたいと思う。なぜなら反切改良のためには音節構造に對する理解が不可缺であり、漢字音を如何に分析するかということが改良方法へ影響すると考えられるからである。

一、三字切法とその評價

『度曲須知』の作者沈寵綏は字は君微、號は適軒主人、吳江（松陵）の人である。明末清初の人であるが、現在のところ精確な生年は不明で、ほぼ萬曆の頃と考えられているようである。卒年に關しては、『弦索辨訛』（同じく沈寵綏の著作）に對して子息・沈標（字は廉志）が記した「續序」に、

乙酉歲、手著中原正韻一書、未竣、會避兵搶攘、齋憤永背。

とあることから、乙酉歲すなわち順治二年（1645）に没したと考えられる。⁽²⁾ 沈寵綏に關しては『吳江縣志』に傳があるものの、事跡はあまり審らかではない。⁽³⁾ その傳の末尾に、

安溪李光地見其書盛稱之、謂「不但有功於詞曲、且可爲學者讀書識字之助」⁽⁴⁾。

とあるように、『音韻闡微』編者の一人李光地（1652-1718）が沈寵綏の著作を高く褒め稱えたと添えられている點は、特に注目に値するであろう。この記述は、具體的には『榕村語錄』に記された次のことばを指すものと思われる。

毛稚黃書及度曲須知、亦曉得支微齊歌麻魚虞七部之字無頭、它部之字皆有頭。卻不知七部乃聲氣之元、別字都

是他生的、無有生他者。如「西遼烏」是「蕭」字、「西」是字頭、「遼」是字腹、「烏」是字尾。⁽⁵⁾

右文中に例示されている「西遼烏」は三字切法の一例である。

李光地より以前に毛先舒(1620-1688)が、すでに『度曲須知』に収める「字母堪刪」に對して次のように高く評價している。

反切之法、上聲下韻、事甚簡捷、理亦顯明。或字母之學參之反滋煩糝。此沈君徵字母堪刪一論爲確然也。⁽⁶⁾

この「字母堪刪」は三字切法について最も具體的に説明した箇所であり、つまり毛先舒が賞賛しているのも三字切法に他ならないと考えられる。

では、この三字切法とは如何なる方法であろうか。次節で詳しく見ていくこととする。

二、三字切法をめぐって

極めて簡潔に説明すると、三字切法とは、一つの漢字音を三つに分けて音注をつける方法である。通常の反切は一つの漢字を聲母と韻に分けて漢字二文字で表すが、三字切法は文字通り三文字で構成する反切の一種といえよう。具體的には沈氏は次のように説明している。

篇中三字切法、上一字卽字頭、中一字卽字腹、下一字卽字尾。每韻摘出幾字、以備觀覽。⁽⁷⁾

つまり、沈氏によると、漢字音は頭・腹・尾の三つの部分に分析できるのであり、各々を漢字三文字で表したのが三字切法であるというわけである。

では、字頭・字腹・字尾は具體的に何を指すのが問題となるが、これに關しては先行論文に二通りの解釋がなされているので、以下、簡單に見ておきたい。⁽⁸⁾

・劉復氏の見解

劉1930は未完の講演録で、最も早期に沈氏の語音分析を解説した論文と位置づけられるであろう。まず字頭についてであるが、以下の二つの解釋を想定して論じている。

a 當時、音聲記號が無かったため、一つの漢字で一子音を代表させた。

b 一つの漢字がすなわち字頭そのものを表す。つまり字頭は最初の子音のみならず、その後に續くわたり音をも含む。

もしaの解釋の方を採ると、字頭は初めの“雜音”すなわち子音(聲母)ということになり、⁽⁹⁾ bの方を採るならば、字頭とは一つの文字の初めの、まだわずかに聞こえるの音の部分を目指すことになる、という。そして劉氏自身は、字腹に對する解釋をも含めて考えると、bの可能性が高いと考えているようである。

では、その字腹の方はといえば、沈氏が字頭を“幾微之端”、字腹を“聲調明爽”と表現していることから、⁽¹⁰⁾ 字頭と字腹の區別は“響點の大小”すなわち音聲の響きの大きさにあると考える。

さらに沈氏が挙げた具體例(“蕭”の字頭“西”、“操”の字頭“雌”、“腰”の字頭“噫”)の分析を試みる。もし、假にaの解釋の如く各々の字頭が單に聲母のみを表すとすれば、字腹・字尾は以下の如くそれぞれ異なった音を示すこ

とになる。

“蕭”の字頭“西” || s、字腹・字尾 || -ian
 “操”の字頭“雌” || ts、字腹・字尾 || -au
 “腰”の字頭“噫” || j、或いは i、字腹・字尾 || -au 或いは -ian

これに對し、もしbのように、字頭とは音聲の響きが小さい最初の部分を指している、と解釋すれば、各々の字腹・字尾は均しく同じ音(つまりb)となり、以下のようにすつきりまとまる。

“蕭”の字頭“西” || si、字腹・字尾 || -au
 “操”の字頭“雌” || ts、字腹・字尾 || -au
 “腰”の字頭“噫” || j、或いは i、字腹・字尾 || -au

したがって字頭についてはbの解釋の方が妥當であるとし、結果、字腹・字尾は字頭を除いた部分と考えた方がよい、としている。

字尾は一字音の中の最後の音を表すが、實質的には文字の最後の“餘音”にすぎないとする。劉氏の解説では、韻をよく理解できていない者が“餘音”をなおざりにするのを恐れて、沈氏が特別に注意を拂つたのだ、という。

ごく簡潔にまとめれば、沈氏の字頭・字腹・字尾は音節構造に基づく分け方とするより、音の響きによる分類で

あると考える方が妥當、とするのが劉1930の趣旨である。

・董忠司氏の見解

董氏は、劉1930の説を否定こそしないが、それとはまた別の解釋も考えうる、と新たな見解を示している。董1961では字頭・字腹・字尾のみならず、他の音律用語である“字面”“字端”“出字”“收音”などをも採り上げて詳細な分析を行っているが、董氏自身が最も着目している沈氏の音律論は、やはり字頭・字腹・字尾の三つに分けた點であるという。⁽¹¹⁾反切との関連から分析して、舊來の反切上字が字頭に相當し、反切下字は字腹・字尾に當たると解釋している。さらに董氏は三字切法の具體例七例を分析したうえで、字頭・字腹・字尾は決して「聲母・介音と主母音・韻尾」に對應するものではないとし、字頭には聲母のほか介音もしくはㄨ（或いは主母音？）も含まれ、字腹は主母音と韻尾を表し、字尾のみが韻の最後の單音音素を表す、とする。そして、“收音”とはすなわち字尾⁽¹²⁾韻尾であると判断し、『中原音韻』から推定した再構音を示す。董氏の解釋する“收音”をまとめると、以下のように示すことができよう。⁽¹³⁾

（收音）

收鼻音—東鐘・江陽・庚青…ㄨ

收舐腭（舌）音⁽¹⁴⁾—真文・寒山・桓歡・先天…ㄨ

收閉口音—侵尋・監咸・廉纖…ㄩ

收噫音—齊微・皆來…ㄩ

收鳴音—蕭豪・歌戈・尤侯・模（魚模之半）……

收于音—魚（魚模之半）……

（不收音）

開尾韻—支思……（收衣詩切之音）・家麻……（收哀巴切之音）・車遮……（收哀著切之音）

しかし、同論文中の別に解説では、陽聲韻の字尾は最後の單音音素を、陰聲韻の字尾は“元音後之收勢”（母音の後の餘韻）とし、必ずしも一律に“收音”≡字尾≡韻尾と捉えているわけではないことが解る。

また、董氏は、劉氏の“響點の大小”に言及し、劉氏説の根據となる『度曲須知』中の“幾微之端”が字音の最初の部分を指していると解釋すれば、必ずしも“響點の大小”と推論するには足りないのではないかと異議を唱えている。その理由として、沈氏が“頭・腹・尾”という命名をしていることを挙げ、“響點の大小”とするよりは、文字の音の始めと終わりに着眼して音節を理解していると解釋するのが自然であろう、という。

三、字頭・字腹・字尾について

さて、本稿で具體的に字頭・字腹・字尾の内容を検討するに当たり、三字切法と關連して沈氏が非常に力を入れて解説している“收音”について觸れておきたい。

沈寵綏は『度曲須知』所收「收音總訣」「收音字譜」「收音問答」ほか、いくつかの項を設けて“收音”について特に念入りに解説しており、また「中秋品曲」「鼻音抉隱」においてもさらに採り上げて説明している。したがって、沈氏にとって、“收音”はことさら強調すべき重要事項であったことに疑いを入れない。その“收音”には、

「收音總訣」および「收音譜式」から判断して、九類あると考えられる。すなわち、收鼻音・收閉口音・收舐腭(舌)音・收噫音・收鳴音・收于音・收衣詩切(或いは醫詩切)之音・收哀巴切之音・收哀審切(或いは遏叶¹⁵)₁₅之音の九種である。この點に關しては、董氏も同じである。しかし、果たして董氏のように「收音」₁₅ 卽字尾₁₅ 韻尾としてよいのであろうか。まず、この問題について以下で見えていきたい。

『度曲須知』上卷「字母堪刪」に、

予嘗考字於頭・腹・尾音、乃恍然知與切字之理相通也。蓋切法卽唱法也。曷言之。切者以兩字貼切一字之音。而此兩字中、上邊一字卽可以字頭爲之。下邊一字卽可以字腹・字尾爲之。如東字之頭爲多音。腹爲翁音。而多翁兩字非東字之切乎。蕭字之頭爲西音。腹爲鑿音。而西鑿兩字非蕭字之切乎。翁本收鼻。鑿本收鳴。則舉一腹音、尾音自寓、然恐淺人猶有未察、不若以頭・腹・尾三音共切一字、更爲圓穩找捷。

とある。字頭・字腹・字尾を通常の反切上下字に置き換えて考えてみると、上字の部分が字頭を表し、下字が字腹・字尾を表す。つまり、下字を發音すれば、自ずと尾音もついてくるものだが、しかし、よく解しない者がいるのを恐れて、字頭・字腹・字尾の三音で表すのがよい、とするのである。ここを見る限りでは「收音」(收鼻・收鳴)₁₆ 卽韻尾を指すようである。しかし、別の箇所では、

至於支思・齊微・魚模・歌戈・家麻・車遮數韻、則首尾總是一音、更無腹音轉換、是又極徑極捷、勿慮不收者也。¹⁶

という。支思・齊微・魚模・歌戈・家麻・車遮などの韻に関しては、「不收」を氣にしなくて良いのであり、また、客又曰、今人既犯認腹爲尾之病、則將去其腹音、亦齊微等韻早收尾音、不亦可乎。曰、不可。聲調明爽、全係腹音、且如蕭豪二字、何等高華、若不用字腹、出口便收鳴音、則幽晦不揚、而字缺圓整。故尾音收早、亦是病痛、而閉口韻尤忌犯之、是字腹誠不可廢也。⁽¹⁷⁾

という箇所からも、齊微などの首尾一音の韻は、腹音を取り去って「早收尾音」となりがちであるということが解る。ここから、これらの陰聲韻にも字尾がある（すなわち字尾の無い韻は無い）、と沈氏が考えているらしいことであり、必ずしも韻尾＝字尾と捉えているわけではないのは明らかであろう。つまり、沈氏にとって韻尾ゼロという概念は恐らく無かったのではないかと思われ、また、少なくとも單母音の韻においては、字尾が音節構造の韻尾部分を指しているとは考えにくいのである。

それでは字尾をどう解釋するか、ということが問題となるが、それには當時の吳語が関係あると思われる。沈龍綏が隨所において「收音」や字尾あるいは尾音に對して、注意を要すべきであると強調していることは先にも述べたが、『度曲須知』を見てみると、

緣夫吳俗承訛既久、庚青皆犯眞文、鼻音誤收舐腭、故譜旁乃有記認。⁽¹⁸⁾

夫詞腭諸集、獨於庚青字眼、旁記鼻音者、緣吳俗庚青皆犯眞文、鼻音並收舐腭。⁽¹⁹⁾

即如閉口字面、設非記認譜旁、則廉纖必犯先天、監咸必犯寒山、尋侵必犯眞文、訛謬糾牽、將無底止、夫安得

不記。⁽²⁰⁾

とあることから解るように、すでに當時の吳語において、ㄱの庚青韻がㄴの眞文韻に合流し、またㄷ韻がㄹ韻に合流していたことはほぼ間違いないと考えられ、沈氏が「收音」に關して注意を喚起すべく「譜旁」⁽²¹⁾を記すのは、そうした吳語の状況を反映するものであろう。つまり、吳語を話す者のなかで、これらの陽聲韻尾の相違を解さない唱い手があり、そうした者にもきちんと發音できるように、沈氏が配慮して『度曲須知』を著していることが看取されるのである。同じく、

予嘗刻算磨腔時候、尾音十居五六、腹音十有三、若字頭之音則十且不能及一。⁽²²⁾

とあるのも、戯曲において唱い手が發音する際の、字頭・字腹・字尾それぞれが占める長さを指摘したものである。沈氏が「收音」の重要性を強調するのは、唱い手にとって字尾が最も長く發音される箇所であり、かつ吳語を日常語とする者の間では過ちを犯しやすい部分であったからと思われる。

余曰、凡數演一字、各有字頭・字腹・字尾之音。頭・尾姑未贅指、而字腹則出字後、勢難遽收尾音、中間另有
一音、爲之過氣接脈。……(中略)……由腹轉尾、方有歸束、今人誤認腹音爲尾音、唱到其間、皆無了結、以故東
字有翁音之腹、無鼻音之尾、則似乎多。先字有煙音之腹、無舐腭音之尾、則似乎些。種種訛舛、鮮可救藥。⁽²³⁾

に見られる記述も、上の吳語における合流を指して言っていると考えられるが、ここからも（吳語であるとは明記されていないもの）やはりㄣ（『鼻音之尾』）やㄣ（『腭音之音』）の發音がきちんとなされていない様相が看取される。こうしたことから判断するに、字尾とは、本来あるべき韻尾が發音されない、或いは誤つて發音されるのを懸念して、わざわざ付け加えたものとも解釋される。逆に、これらは吳語を操らない人にとっては無くても差しつかえないのであつて、必ずしも一概に韻尾をさすとはいえないと思われる。また一方で、

至若家麻諸韻之本無字腹者、只須首尾兩音爲切。⁽²⁵⁾

ともあり、字腹は必ずしも常に主母音を指すというわけではないことははっきりしている。⁽²⁶⁾もし字尾を主母音の餘韻であると解釋するなら、このような陰聲韻の場合において、『首』（字頭を含む）が主母音をも含みうると考ねばならないであろう。しかし、上文に續けて、

然又有首尾無異音者、但可以本字入聲當字首、如齊字之頭、止有疾音、疾即齊之入聲也。∴（中略）∴惟是腹尾之音、一韻之所同也。而字頭之音、則逐字之所換也。⁽²⁷⁾

とあることから、字頭には入聲字を用いることによつて聲母のみを表そうとしたと理解した方が妥當かもしれない。そうすると、少なくともこの部分に関しては、『尾音』とは主母音を指していると考えられるであろう。

字頭について、さらに別の角度から見てみたい。字頭・字腹・字尾が比較的明確に示される三字切法を採り上げ

てみよう。「字母堪刪」に示された三字切法は以下である。

〈皆來〉 收噫音 皆・幾哀噫切 猜・雌哀噫切 飾・師哀噫切 挨・衣哀噫切 衰・舒哀噫切
 〈蕭豪〉 收鳴音 蕭・西鑿鳴切 刁・低鑿鳴切 暮・希鑿鳴切 梢・尸鑿鳴切 嬌・幾鑿鳴切
 〈尤侯〉 收鳴音 尤・奚侯鳴切 劉・離侯鳴切 眸・迷侯鳴切 囚・齊侯鳴切 求・其侯鳴切

これを見る限りでは、字頭は決して聲母のみを表しているのではなく、介音をも含まれていることが解るであろう。また、『度曲須知』に見られる音注には、『中原音韻』の反切と、『洪武正韻』の反切が少なからず引用される。周知の如く、周德清の『中原音韻』には反切注記はない。この矛盾に關しては、既に鈴木(1981)により『度曲須知』引用の『中原音韻』反切とは、實は葉以震『重訂中原音韻』(以下、葉本と略稱する)の反切と合致することが多いと指摘されている。このように、『度曲須知』所收の音注にはそれ以前の韻書等から引用された音注が少なからず混在しているわけだが、三字切法についての説明がなされる「字母堪刪」に收められる反切は、葉本と合致せず、また『洪武正韻』の反切とも一致しない。おそらく沈龍綬が独自の反切であろうと考えられ、沈氏自身の音律論が反映された反切と思われる。以下掲げる。

〈東鐘〉 收鼻音 東 多翁切 鐘 之翁切 通 拖翁切 松 思翁切 空 枯翁切
 〈江陽〉 收鼻音 江 幾航切 桑 思航切 章 知航切 商 尸航切 光 枯航切
 〈眞文〉 收舌腭音 眞 知恩切 昏 呼恩切 因 衣恩切 噴 癡恩切 欣 希恩切

〔寒山〕	收舌腭音	山	師安切	姦	幾安切	彎	烏安切	慳	欺安切	餐	雌安切
〔桓歡〕	收舌腭音	桓	華寒切	瞞	磨寒切	盤	蒲寒切	攢	慈寒切	丸	吳寒切
〔先天〕	收舌腭音	先	西烟切	煎	藿烟切	堅	幾烟切	媚	居烟切	喧	虛烟切
〔庚青〕	收鼻音	明	迷恒切	靈	離恒切	情	齊恒切	成	池恒切	曾	慈恒切
〔尋侵〕	收閉口音	侵	妻恩切	鍼	知恩切	深	施恩切	欽	欺恩切	金	飢恩切
〔監咸〕	收閉口音	監	飢庵切	三	思庵切	杉	師庵切	簪	茲庵切	攙	癡庵切
〔廉纖〕	收閉口音	廉	離鹽切	鈐	其鹽切	蟾	池鹽切	髯	時鹽切	甜	提鹽切

沈氏が挙げたのは全て陽聲韻の韻目とその代表字であり、三字切法では表されていないが、韻目の下に“收音”の類別が記されており、これらの韻は“舉一腹音、尾音自寓”であることから、三字では表さなかつたのであろう。以上を見る限りでもやはり字頭（ここでは反切上字）が單に聲母のみをさすとは解しがたいのである。

結 び

以上をまとめてみると、次のように解釋できるのではないだろうか。⁽²⁸⁾

・陰聲韻（單母音）の場合

字頭 || 聲母（或いは主母音も含む） 字腹 || ゼロ 字尾 || 主母音（或いは主母音の餘音）…i・i・a・i・-u・-y

・陰聲韻（複母音）の場合

字頭 || 聲母ならびに介音 字腹 || 主母音 字尾 || 母音尾（或いは主母音の餘音）…i・i・-i（-u・-e）

・陽聲韻の場合

字頭 || 聲母ならびに介音 字腹 || 主母音と韻尾 字尾 || 韻尾 : ㄊ・ㄊ・ㄊ

陽聲韻の場合は韻尾が二重になっているが、これは吳語において合流が起こっているため、特別に注意して發音するようにとの配慮からなされたことと考えられる。

三字切法はおそらく當時においても、めずらしい音注であったと思われる。管見の及ぶ限りでは、以後この三字切法が廣く用いられた形跡もないことから、普及しにくかったであろう。廣く浸透しなかった理由はいくつか想定されるが、一つには音注の漢字が三字に増えれば、當然その理解が難しくなると考えられる。二つめには、沈寵綏自身が述べているように、この三字切法は唱曲の助けの爲に考案されたと思われ、韻書等の音注とは異なる性質を有していた點も關係するであろう。さらに、字頭・字腹・字尾などの用語とその範疇が解りづらく、受け入れられなかったものと想像される。

以上のように、以後汎用されることの無かった三字切法ではあるが、現代の我々の眼から見てもその音聲觀察には目を見張るものがあり、一部の文人に絶賛されたこともまた、確かである。この三字切法が、滿洲語對音における三合切音と如何なる關連があるのか、今後の課題となるであろう。

註

- (1) 本稿では『四庫全書存目叢書』所收の『度曲須知』『弦索辨訛』を底本とする。ただし、このテキストの缺落部分及び印字不鮮箇所は大谷大學所藏『度曲須知』(線裝本。刊行年は不明)にて補う。
- (2) なおこの「續序」は中國古典戲曲論著集成本では『度曲須知』の末尾に付される。

- (3) 中國方志叢書所收『吳江縣志』（すなわち『乾隆吳江縣志』影印本）卷三十三參照。
- (4) 同右、四十五葉裏。
- (5) 理學叢書本『榕村語錄』（中華書局1995年）卷三十詩文二參照。
- (6) 『韻學通指』三十四葉裏參照。
- (7) 『度曲須知』上卷「字母堪刪」。
- (8) 劉1930・董1991の他に、關連がありそうな論文として、都兴宙「沈宠绥音韵学简论」（青海师范大学学报1994年04期）・俞为民「沈宠绥的戏曲声律论——江苏古代戏曲学家研究之五」（艺术百家2000年02期）が挙げられるが、残念ながら未入手。
- (9) 「如後説、所謂何字頭、應是一個字開首時的雜音（舊譯作“子音”、或“輔音”、今據音理改譯爲“雜音”；其舊譯作“母音”或“元音”者、今改譯爲“純音”；半純音如下“尤”“三”中的確“”、“”、以雜音論）」
- (10) 『度曲須知』上卷「收音問答」に記された「客又曰、今人既犯認腹爲尾之病、則將去其腹音、亦齊微等韻早收尾音、不亦可乎。曰、不可。聲調明爽、全係腹音、且如蕭豪二字、何等高華、若不用字腹、出口便收鳴音、則幽晦不揚、而字缺圓整。故尾音收早、亦是病痛、而閉口韻尤忌犯之、是字腹誠不可廢也。客曰、字腹字尾、拈説既明、所云字頭之音、亦有說歟。曰、凡字音始出、各有幾微之端、似有如無、俄呈忽隱、於蕭字則似西音、於江字則似幾音、於尤字則似奚音、此一點鋒銳、乃字頭也。：（以下略）」による。
- (11) 董1991 p.188。
- (12) 董論文 p.191「但可以説沈氏的“字尾”就是“韻尾”」。
- (13) 董論文 p.197～p.208。
- (14) 「收音總訣」では「舐舌」、「收音譜式」他では「舐脰」と記すが、どちらも同じく先天韻と眞文韻の“收音”を示していることから、同一と見なす。
- (15) ○には平・上・去のうちのみ入るという意味。
- (16) 『度曲須知』上卷「收音問答」。
- (17) 『度曲須知』上卷「收音問答」。

- (18) 『度曲須知』上卷「鼻音扶隱」。
- (19) 『度曲須知』上卷「收音問答」。
- (20) 『度曲須知』上卷「鼻音扶隱」。
- (21) 王驥德『曲律』二卷「論閉口字」にも「蓋吳人無閉口字、每以侵爲親、以監爲奸、以廉爲連、至十九韻中途缺其三。」とある。
- (22) “譜旁”とは、文字の傍らに注記することであり、それによって、鼻音・閉口などの類別を瞭然と示す。
- (23) 『度曲須知』上卷「字頭辨解」。
- (24) 『度曲須知』上卷「收音問答」。
- (25) 『度曲須知』上卷「字母堪刪」。
- (26) 拙稿2000において「沈龍綏は漢字音が「字頭・字腹・字尾之音」すなわち聲母・主母音・韻尾の三つより構成されていることを明確に認識しており、…（以下略）」と記したが、今回仔細に検討した結果、少なくとも常に字腹＝主母音として成り立ちうるわけではないことが判った。ここに改める。
- (27) 『度曲須知』上卷「字母堪刪」。
- (28) 音聲表記については必ずしも最適の表記であるとは思わないが、比較の便を考え、董196と同じ表記を用いる。

〈参考文献〉

* 中文

- ・劉復「明沈龍綏在語音學上的貢獻」(『國學季刊』第2卷第3號 1930年)
- ・陳多、葉長海注釋『王驥德曲律』(湖南人民出版社 1983年)
- ・林慶勳『音韻闡微研究』(臺灣學生書局 1988年)
- ・董忠司「明代沈龍綏語音分析觀的幾項考察」(『孔孟學報』第六十一期 1991年)
- ・錢乃榮『當代吳語研究』(上海教育出版社 1992年)

- ・李榮主編『蘇州方言詞典』（江蘇教育出版社 1993年）
- ・汪平『蘇州方言語音研究』（華中理工大學出版社 1996年）

* 日文

- ・佐々木猛「明・王文璧『中州音韻』の性格」〔均社論叢〕VOL. 5 1977年）
- ・鈴木勝則「明末清初の論曲書における『中州音韻』及び『重訂』中原音韻』音注の利用」〔『中國語學』228號 1981年）
- ・古屋昭弘「『度曲須知』に見る明末の吳方言」〔『人文學報』No. 156 東京都立大學人文學部 1982年）
- ・落合守和「『西域同文志』三合切音の性格」〔静岡大學教養部研究報告人文・社會科學篇第19卷第2號 1983年）
- ・落合守和「『增訂清文鑑』十二字頭の三合切音」〔静岡大學教養部研究報告人文・社會科學篇第20卷第2號 1985年）
- ・鈴木勝則「明・葉以震『中原音韻』考」〔『JIAOXUE』No. 10 日中學院 1986年）
- ・浦山あゆみ「『音韻闡微』の反切作成法について」〔『大谷學報』第79卷3號 2000年）

（大谷大學助教授）